

NHK宗教放送の歴史に関する一考察

榎本 香織

0 はじめに

本稿は日本放送協会（以下、NHK）の宗教番組についてその歴史を俯瞰すると共に、こんにちにおけるその意義と課題について若干の考察を行うものである。

0-1 宗教情報氾濫化の問題

インターネットの登場を契機としたメディアの多様化・細分化に伴い、それまで一方的な受け手であった一般人が情報の送り手としても参加する事で、メディア全般における宗教の情報量が膨大に増えた。メディア空間に現れる宗教の姿は、客観的情報から個人の気まぐれな語りまで、玉石混合の様相を呈している。

その一方で、今なおテレビが一般家庭に与える影響が少なくないのも事実だろう。近年、テレビ番組の質の低下やネットと比較した場合の情報提供の遅さ等が取りざたされているが、これらは個人・企業問わず多方向情報発信が可能なネットの持つ即時性が、テレビの放送と比べて相対的に際立つ結果となったに過ぎない部分もあるし、またこうした比較対象としてテレビが挙げられるのも、テレビという媒体が今でも我々の日常に大きな比重を占めているためとも言える。

石井研士によると、テレビで放送される宗教放送番組は、大別して4種類に分けられるという。第一は教団提供の宗教番組、第二は教養番組としての宗教番組、第三はバラエティ番組としての宗教番組、そして第四はニュース報道で取り上げられる報道である¹⁾。特に視聴率が高いのはバラエティとしての宗教番組で、「責任ある宗教情報とはまったく無関係な宗教情報が、膨大に流されている」という石井の指摘は、未だ衰えを見せないこうした番組とその影響力、受容側の宗教的メディア・リテラシーの未構築の現状を鑑みると、今なお憂慮すべき問題といえる。メディアの多様化、テレビの宗教番組のバラエティ化は、宗教に無関心な人々に対しより身近に「宗教」というものに触れる機会を与えた。これは一見歓迎されうることであるが、それが宗教情報を見極める力の涵養に貢献しているとは必ずしも言えないのが現状である。

0-2 公共宗教放送研究の現状

また民放の宗教番組とは一線を引き、今日に至るまで長年ラジオやテレビを通じて宗教番組を提供しているのがNHKである。ラジオやテレビの宗教番組を、膨大な資料を用いて詳細な分析を続けてきた石井は、NHKの番組制作が「放送法」やそれを敷衍した「国内番組基準」の下に行われ、民放よりはるかに適正に制作されているとし、課題は残されているとはいえ民放より高

い評価を行っており⁽²⁾、筆者も概ね同様の意見である。しかしながら民放とNHKの宗教番組の反響が必ずしもその質と比例していないのが、現在の日本人の多くが持つ宗教性の一側面を表していると言えるのではなからうか。

それではNHKは今までのような放送を行ってきたかと言うと、それを纏めた研究は不思議と少ない。情報化社会と謳われ久しい昨今であるが、公共放送の宗教番組研究は、その歴史の深さとは反比例するかの如くである。これは民放に比べ番組変化のダイナミズムに欠ける点、その性質から所謂「無難」な傾向にならざるを得ず、番組の歴史を通観しても内容的に大きな変動がさほど見受けられないと思われてきた点、資料（過去の番組等の）入手面での困難等が背景として推察される。番組分析という形での宗教放送の変遷を辿る事は現状なお不可能に近いが、それでも現存の資料を通じて見えてくるものもある筈である。

0-3 先行研究と本稿の視座

NHKの宗教放送番組に関する先行研究は、その蓄積に恵まれているとは言い難いが、例えば石井の放送開始時から昭和30年代におけるラジオ宗教放送の歴史と、オウム以降のテレビ宗教番組についての詳細な分析が挙げられる⁽³⁾。これはNHKのみならず民放ラジオ宗教放送の当時の実態まで幅広く把握しており、ラジオ黎明期から戦後にかけての宗教ラジオ放送史の流れや現代のテレビ宗教番組の現状を把握するのに重要な役割を果たしている。ラジオに関する一連の研究は昭和30年代、つまりテレビの登場でラジオ宗教放送が衰退する時点で一応の締め括りがなされ、テレビ研究に関しては、主にオウム事件以降の民放の宗教番組の在り方について分析し、様々な角度から問題提起をしている。本稿はこれらのNHKに関する研究を援用しつつ、それ以降の番組の歴史やその背景についての若干の補填を試みるものである⁽⁴⁾。

1 NHK宗教番組の歴史

1-1 放送開始から戦争開始時までのラジオ番組

NHKが最初に宗教放送を開始したのは、ラジオ開局間もない大正14年（1925年）で、タイトルは「宗教講座」であったという⁽⁵⁾。同年7月に「修養講座」に改称されるが、昭和7年に定時放送化され、タイトルも「宗教講座」へ戻される。その後太平洋戦争開始により昭和16年3月に宗教放送が一時中断されるまでに「聖典講義」「宗教講話」「朝の修養」「修養講和」（第一放送）「日曜礼拝」「日曜勤行」（第二放送）と、多くの番組改変が行なわれた。特に「聖典講義」は、「放送内容が単に老人のみを対象とする慰安や満足の境地をねらいとせず、広く青年層への呼びかけに苦心を払い、宗教や経典に対する解説が当時の若い世代の感覚にも適合するように考慮」し、また講師の友松圓諦による親しみやすい語りや日常に即した話題選び、当時の時代背景等も相まって老若男女問わず反響を呼んだという⁽⁶⁾。しかし日華事変後の国民精神総動員により、放送内容も次第に個人の精神的修養から集団的行動規範の準則を示すような内容へと変容していった⁽⁷⁾。

実際の放送内容を検証する手立ては無いが、『ラヂオ年鑑』を繙き概要を見てみると、昭和10年に「聖典講義」が終了し「朝の修養」が開始してからの変化は特に顕著で、一気に国体的色彩

を帯びている。昭和8年頃までは「仏教と女性」等、「宗教の生活化・家庭化を目指した」日常生活に根差した実践的テーマが設けられたりもしたが⁽⁸⁾、昭和9年は先の「聖典講話」が評判を得る一方で、「宗教講話」では「共存共栄」「東亜の将来と日本佛教」「教育宗教接近の新傾向と國體神道の本義」等の國体色を帯びた単語が目立つようになり⁽⁹⁾、昭和10年の「朝の修養」は「和漢洋各種の經典、聖賢、哲士の言葉を夫々權威者に委嘱して解説放送し精神修養の糧たらしめてゐる」とされている⁽¹⁰⁾。また『ラジオ年鑑 昭和12年版』によれば「明治天皇御製謹話」が年頭に放送され、翌年には『明治天皇御製謹話』に代わり『御歴代天皇御製謹話』を十日間に互り加藤大将、金子元臣氏等十名士により放送した⁽¹¹⁾という。伝統宗教の講話に混じり「立正安國論講話」等「健全なる國民思想涵養上適切なる題目」を選定したとされ⁽¹¹⁾、宗教放送が当時の國民精神を鼓舞させる手段として利用されていた事がわかる。

1-2 戦後からテレビ登場までのラジオ番組

1-2-1 「宗教の時間」とCIEによる監督指導

宗教放送が再開されたのは、昭和21年1月20日、ここで初めて現在継続中の長寿番組「宗教の時間」というタイトルが登場する。終戦後初出版の『ラジオ年鑑 昭和22年版』で、「宗教の時間」は以下のように紹介されている。

日曜日の神道、佛教、キリスト教の時間は、昭和廿一年一月廿日に創設されたもので、國民の宗教的関心を高め各自の信仰を深めることを使命としている。従って、宗教に就いての理論的な説明も、それが信仰生活の糧として有益なものである限り、実践を離れた宗教的知識の紹介に墮せぬように注意を払っている。講演者には体をもって宗教を行じている人々を招じ、宗教が深く生の根底をなすものであり、真理のみが各自に精神の自由を与えるという自覚を、回を重ねることにより、一般に喚び起こすように企画している。⁽¹²⁾

さらに23年版では「宗教本来の立場からいえば、宗教は文化創造の根源に働きかきかけるものでなければならない。神道・仏教・キリスト教は、それぞれ、自らの宗教的生活原理をもって時代風潮を清め正さなければならない⁽¹³⁾」と記され、24年版ではより具体的に戦時中国家権力の庇護を受けていた宗教放送の在り方への批判を明言し、そこからの脱却を方針としている。

(神道・仏教・キリスト教が単純に均等化した放送時間を得ることが問題でもあることを受けて)しかし、ある特殊の宗教だけが国家権力の庇護をうけて放送にも特権をもっていた過去の宗教放送が宗教の冒流であったとすれば、機会均等の原則の上に立つ今日の放送においてこのような番組の編集もまたやむをえない。

さて今日の宗教放送において最も重要なことは、長年国家権力の枠内でちっ息(原文ママ)状態におかれていた我国の宗教が初めて自由で真実な宗教本然の姿へと解放されたのであるから、その真実な宗教の姿を具体的に提示することである。⁽¹⁴⁾

戦時中の国民精神総動員の気色は取り払われ、再び各宗教（神道・仏教・キリスト教）の基本的教義の解説や講和を中心とした内容に原点回帰したと思われるが、ここで従来と異なるのは「実践を離れた宗教的知識の紹介に墮せぬように注意を払っている」「講演者には体をもって宗教を行じている人々を招じ」等、実践知としての宗教の在り方をより前面に押し出そうとした点である。これが戦後混乱期における個々人の精神的基盤確立の急速な要請に応えるためのものである事は明らかで、実際当時のラジオ教養番組は連合軍総司令部（GHQ）の下部機関である民間情報教育局（CIE）による直接的な指導監督や検閲が行なわれており、戦時色の一掃と民主化を目標とし、新時代にふさわしい教養の養成や知識の向上が図られた。終戦直後のNHKのラジオ放送はCIEとの関係を抜きにして語ることは不可能で、CIEは日本の軍国主義を排除し、民主主義を徹底させるためには、マスメディアの改革が必要不可欠であるとし、最大限にこれを利用した為である。

ここで注目したい点がある。『日本放送史』によれば、この頃「戦前には放送からしめ出されていた天理教・大本教・金光教の新興宗教にも、CIEの示唆により放送の機会が与えられるようになった⁽¹⁵⁾」という記述である。「示唆」の具体的内容については説明がなされていないが、CIEが信教の自由の下、より多くの宗教に対し電波利用の門戸を広げようとNHKにも働きかけたと理解できる。

1-2-2 NHKによる「新宗教」放送

『GHQ日本占領史』は、当時の新宗教の登場を「既成宗教の利害に直面」するものであったと述べ「すべての宗教—奇妙で狂信的な新しい信仰であっても—に対する完全な自由という概念は容易には理解されなかった」と報告している⁽¹⁶⁾。

伝統宗教の代表者達は、大きな社会混乱の元となりかねない新宗教に対し、その取り締まりを政府に請願をし、政府はそれを受け調査を開始した。そして新宗教団体に対し団体等規制令を用いて解散を試みようとしたが、GHQはそうした一連の行動に対し、宗教の自由を理由に反対の立場を取ったという事である。これは同書の「宗教間の平等」に関する報告においても同様の内容が繰り返されている⁽¹⁷⁾。

笹川紀勝はGHQが仏教、神道、キリスト教の他に新宗教まで含めた宗教観の平等を目指したのは、GHQが第三者として日本の諸宗教に対したからとしている⁽¹⁸⁾。つまり全ての宗教が同じ基礎に立ち、公平な機会を与えるという事自体が当時の日本人には考慮外の視点であったという訳である。しかし昭和5年1月には既に天理教二代目真柱、中山正善がNHKで講演を行っている。石井の報告によれば、この時に放送されたのは中山正善管長の「勇んで働け」という講演であり⁽¹⁹⁾、これはその年の初めにNHK大阪放送局放送部社会教育課主事から面識のあった本部員を通じて依頼されたもので、教団機関誌に掲載された記事である事を前提に引用すると「天理教といえ、大きい新興宗教です、なんとか管長さんにも出てもらえんかと思ひ」という事であったという⁽²⁰⁾。そして金光教もまた、民放が始まる以前にNHKの要請で講師が番組に出演している⁽²¹⁾。当時の宗教行政上天理教・金光教等の教派神道は一応正統な宗教とされていたが、天理

教に出演依頼をした当時の社会教育主事が天理教を「新興宗教」と認識していたことは、宗教行政上の区分と世間の認識との乖離や、既に教派神道が新宗教の一分野として取り込まれていた側面を伺わせるものである。「新宗教」という語の持つ印象の時代的变化やNHKが教派神道の宗教行政上の分類に対し、どれほど認識していたかと併せて慎重に検討する余地はあるが、先の『日本放送史』内の記述と併せても、NHKがこれらを「新（興）宗教」と捉え、放送の機会を増やそうと試みたことが見てとれる。

CIEによる指導は実質的には昭和24年10月に廃止されるが、その間にCIEはNHKに対する研修を強化・拡大し、番組企画制作の責任の比重を徐々にNHK側へ移行させていった⁽²²⁾。それに平行してNHKも宗教放送専門委員会を設置し（昭和21年）、「日本放送協会放送準則（昭和24年）」、「放送法（昭和25年）」によりその後も独自の放送基準を制定していく。実際にCIEの指導がどのような形で反映されたかに関しては、大枠の把握になるが、昭和23年の天理教管長中山正善の神道放送枠内での出演、同年に拡充化が図られたローカル放送枠内の「神道の時間」で金光教の秋季大祭の実況、昭和24年8月7日に行なわれた金光教の祭典の全中放送等が挙げられる⁽²³⁾。また昭和29年3月27日では天理教と金光教が「教祖について」⁽²⁴⁾、昭和36年3月26日には大本・金光教・天理教三教の代表者が「日本人の民族信仰」についてというタイトルで出演した記録もある⁽²⁵⁾。

しかしNHKでのこれらの宗教の扱いについては、その後現在に至るまでの展開を見る限り定着はしなかったと言える。CIEが戦後に解放を目指した「新宗教」には、戦後生まれた教団群もある程度は網羅されていた事を伺わせるが⁽²⁶⁾、実際に電波に乗せるかどうかはまた別問題であったろう。昭和29年9月6日に、霊友会、PL教団、生長の家等が「世直し」をテーマとした30分の番組に出演したが、これは「宗教の時間」内ではなく一度きりの特集番組であった⁽²⁷⁾。後述のCIEが直接制作を指導したと思われる新しい宗教番組でも、解放を求めた筈の新宗教が触れられる事は殆ど無かったのである。これには昭和25年の電波法改正による民間放送の開始（民放では、NHKよりも放送内容の規制が緩やかであった為、教団側としても民放の方がより自由な放送活動を図ることが可能だった）や戦後の新宗教ブームに起因する社会的混乱もその一因となったと考えられる。

1-2-3 「立体的な宗教放送」の取り組み — 「光を掲げた人々」「人生読本」—

CIE指導の末期、NHKは従来と趣向の異なる宗教番組を制作している。昭和24年9月11日から第一放送で開始された「光を掲げた人々」がそれである。この30分番組は、より親しみやすい内容で一層広い聴取者を取り込む為に「宗教放送の姉妹版として発足⁽²⁸⁾」し、一時的に「宗教の時間」と取って代わられた時期もあった。「内容は無名な人でも、有名な人でも、人の心に明るい光をあたえ、明日への勇気をあたえるような一生を送った人の記録を広く取り上げるように企画」され、形式も親しみを込めやすいように当時流行していたラジオドラマやラジオ小説、朗読等を採用した。昭和25年時点で取り上げた人物は日本人30名、外国人22名でその内訳は宗教家29名、無名人13名、社会事業家9名、教育者4名、科学者4名、政治家2名、文学者1名であった⁽²⁹⁾。

表1 「光を掲げた人々」放送内容一部

(『ラジオ年鑑 昭和26年』より 後方カッコ内は筆者の補足)

アメリカ赤十字の母 「クララ・バートン」	
一切教の出版に一生をささげた 「鉄眼」	(鉄眼道光)
岡山孤児院の父 「石井重次」	
木と信仰で国を救った 「ダルガス」	(エンリコ・ダルガス)
人道の戦士 「スコット」	(ロバート・スコット)
神の愛に生きた 「細川ガラシャ」	
日本慈善事業の母 「瓜生岩子」	
肥後矢部郷の義人 「布田保之助」	
昆虫の世界に神を見た 「ファーブル」	
印度に福音を伝えた 「ケーリー」	(ウィリアム・ケーリー)

「宗教家が29名を占めるのは、番組の成立ちの上から当然である。無名の人が次に位するのは、この番組が、単に及び難いような偉大な性格を紹介するのに止まらず、努力と誠意があれば、我々にも近づき得る尊い生き方のあることを示そうとする⁽³⁰⁾」とあるように、この他にも良寛やブルーノ・タウト、伊能忠敬や間宮林蔵から義農作兵衛や並河成資、大和清九郎等といった農民まで多様な人物が取り上げられている⁽³¹⁾。名士とは対照的な、一介の農民や貧しい者をも取り上げる事で、聴取者がその物語をより身近にあるものとして受容し、また宗教的体験が偉人にのみ与えられる特権的なものではなく、身分を問わずに与えられるものである事を伝えようとする様子が見て取れる。放送形式もラジオドラマ等の大衆文化の形式を採択した辺りからも、より一般の聴取者の視線を意識したものとなっている。

この番組を制作するにあたり、資料は「NHKの全放送局を動員して集めた⁽³²⁾」とされ、当時のNHKのこの番組に対する試行錯誤の跡が伺える。従来のNHKの宗教番組と比べると少々異彩を放っている様にも見えるが、その背景には、この「光を掲げた人びと」がCIEによる指導下で制作された事が関連しているためと思われる。『日本放送史』によると、昭和22年から23年にかけて機構改革を果たしたNHKは、CIEの助言や指導によってアメリカ式の番組編成や演出方法を導入したとある。「単独の講演形式をはずして、一つの課題を中心に、これをドラマ・演芸・音楽・対談・講演・録音などの異種の要素で総合的に構成するドラマ的手法が、しばしば採用されるようになり、“きかれる講演放送”への脱皮が試みられている⁽³³⁾」とされ、「光を掲げた人々」のラジオドラマやラジオ小説、朗読等の複合的な演出方法も共通点が多い。また『GHQ日本占領史』の資料内でも、公共サービス番組の拡充化の際に教育番組枠として語学や芸術番組と共に宗教番組も取り上げられており、「こうした番組では、演劇読本、対話体作品、民話、物語詩などが重要な役割を果たした」と、教育放送に物語性を重視した手法が導入されたことが認められる⁽³⁴⁾。従って、日本人の「宗教的情操の涵養」はCIEの重要な役割の一つであった事から、平易な形で大衆に浸透させるための新しい演出方法として、CIEがこうした技法をNHKへ伝授したと言える。また、CIEのNHK指導が昭和24年10月に廃止されたのは先述の通りで、その一ヶ月前に

本放送が開始された事を勘案すれば、この「光を掲げた人々」はCIEが関わったNHK最後の宗教番組であり、その制作方針の特色が垣間見えるという意味で貴重な番組であったと言えるだろう。

また昭和25年になると、国内の複雑化した宗教事情を鑑み、放送内容にも多角的な方向性が求められてくる。いわば「宗教放送の立体化」の必要性がここで言及されてくる。

放送内容は、原則として聴取対象を特定の宗教徒に限定することなく、信徒をも含めて国民一般を対象とし、宗教と生活倫理の結び目に多く問題をかけて、誰にも容易に理解していただくよう企画されている。ただし、宗教のような特殊の精神現象においては、殊に信仰形成の立場からは、放送が持つ機能には自ら制約がある。従って具体的番組編成の方式は、聖典解説、その他宗教常識の紹介を縦に、宗教音楽、礼拝実況等、宗教的情操涵養に資するものを横として編成、国民の宗教的欲求の一旦に応えることを心掛けている。⁽³⁵⁾

この「宗教的情操涵養に資する」横軸の一つとして「光を掲げた人びと」は位置づけられると言えるだろう。「光を掲げた人びと」は昭和30年3月27日まで継続したが、一方で「宗教の時間」は、昭和27年1月から、それまで仏教・キリスト教・神道と均等に時間を分割していたのを改め、自由にテーマを選んで番組を制作する形式に再編成される。そして暫く不定期気味だったのを昭和28年9月6日より、第二放送にて再び定時化する。

また翌28年には、より幅広い話題や人生訓を扱った長寿番組「人生読本⁽³⁶⁾」も開始される。『NHK年鑑7 1955年』によると、「人生読本」は以下のように紹介されている。

変転する世に不動のものを求めれば、それは真理であり、それを告げ知らせる古今東西の古典、聖典こそは、われわれの手にすることのできる不動の指針である。

人の世に絶望した時、憂鬱の切りに襲われた時、悲しみに堪え得ない時、人は肉体の病にて人生の処方箋を求めるかも知れない。

その時、小粒ながら、香気ある「人生読本」の扉は、無限の価値をもって、開く人の手を待っている。

昭和30年代に入ると民間ラジオ放送では既に多くの宗教団体が放送事業に参入し、宗教放送ブームの最盛期を迎えるが、一方でNHKの「宗教の時間」は安定期の傾向を見せる。宗教者や専門家等をゲストとして呼び、テーマを設定して対談を行うという番組構成が既に定着化した事や、先の「新宗教ラッシュ」とそれが引き起こした社会的混乱により公共放送として新宗教の扱い自体が難しくなった事、その代わり新宗教をNHK自らが扱わなくとも民間放送がその肩代わりの役割を果たしていった事もその一因となり、放送内容も伝統宗教主体の内容に落ち着く事になる。そして民間放送による宗教放送ブームもまた、昭和35年にテレビが登場する事や都市化による生活様式の変化、制作側の技術的な問題等の様々な要因が絡んだ結果、徐々に下火となっていく⁽³⁷⁾。

小括

昭和20年から30年代にかけては、幕末以降何度か出現してきた新宗教ブーム興隆と重なり、新宗教はいわゆる「淫祠邪教」として世間から一層批判されるようになった時期であり、NHKにとってはこうした状況下でいかに「正しい宗教を伝えるか」が課題となったと言える。

例えば昭和22年1月の璽光尊事件はその象徴であると言え、敗戦以降、昭和20年に天理教、昭和21年には大本、創価学会、PL教団、孝道教団等の大規模な教団が再建される中で起きたこの事件は、「新宗教」という言葉に対しファナティックなイメージを植え付けた象徴的な事件である。NHKもこうした状況を受け、翌年の昭和23年の年鑑には「今日我国の宗教界は神・佛・基を始め正教邪教のもろもろが入り乱れ、日本宗教史上にも例を見ない混乱状態を呈している」とし、新宗教が怪しげな言動で世間を混乱状況に陥れていると批判と懸念を示し「民主主義の下において本当に正しい宗教の在り方を具体的に表示しなければならない」と、公共放送としての宗教番組の使命とその役割を表明する⁽³⁸⁾。

その後も「迷信」に対する批判と「正しい宗教の在り方の提示」を掲げるNHKの方針は続く。昭和25年の様子を『ラジオ年鑑』は以下のように述べる。

現下わが国の宗教事情は極めて複雑多岐である。神道、仏教、キリスト教を始め、各種教宗派数は500余に達し、また一般家庭では、仏壇と神棚を併祀するという複合信仰形態をなし、さらにその信仰実態を検討すれば、伝統的習俗としての形式宗教、知性の低い迷信邪教、封建性温存の基盤となるもの等、その性格は複雑である。⁽³⁹⁾

また、昭和28年度も「日本のあらゆる階層にわたって共通な現象は、その8割以上の人が特定の信仰を持たず、それぞれが自分勝手に編み出した自己流の神で、その日その日を間に合わせている」と継続する宗教混乱の現状を挙げ、「これらの人々に公正な立場から、各教派が説く教えを客観的に企画編集し、それによって、人々が正しい宗教知識を得、深い精神生活を営めるようにと、戦前戦後を通じて一貫した使命を負って続けられてきた」と述べている。

因みにこれら「知性の低い迷信邪教」「自分勝手に編み出した自己流の神」の文言は、新宗教に限らず迷信や心霊実験等のオカルト等、戦後の社会危機が生みだした当時の「宗教」の有り体を表していた。

当時、新宗教ラッシュと共に戦後問題として取り沙汰されたのが迷信の類であった。昭和22年に文部省は迷信調査協議会を設置し、大衆社会に広がる迷信や疑似科学等の実態を整理して纏めた『迷信の実態』を昭和24年に発行している。協議会の目的はあくまで、科学の振興と知識研究の普及を阻害しかねない（古来より因習として伝わる）迷信の現状とその蔓延状況、及びその穏健合理的な払拭方法発見の基礎資料を得るためであったが、世間にはしばしばこの調査は新宗教批判と結び付いて捉えられたのである。『迷信の実態』は当時の調査への反応に関する各新聞の反応も纏めているが、調査の意図を正しく理解したものから、痛烈な新宗教批判へと論を展開するものまで様々であった。ここで留意すべきは「迷信調査協議会の調査はあくまで中立的な立場

から迷信の実態を探るものであったのに対し、世間ではそれが新宗教批判へ接続された」という事である。不可分の関係ではありながらも、厳密には別問題として扱われるべき迷信と宗教であるが、ここで迷信と連動して批判される「宗教」の指すところは伝統宗教より新宗教の傾向にあった。ここからも新宗教の民衆習俗との親和性や、世間の新宗教に対する潜在的な批判精神の反映が改めて確認できる。

迷信調査協議会委員の一人であった岸本英夫は、昭和23年7月7日付の『時事新報』に「迷信の社会性」という記事を寄稿しており、日本の社会における迷信の横行の理由として①科学思想の低調、②教育の欠陥からくる大衆の宗教に対する無知、③既存宗教教団の無力を挙げ、「これらの点が是正され大衆の社会的知識の水準が高くなるのが迷信打破の先決である」と所感を述べている。これは新宗教という形で立ち現れた救済の在り方や迷信に関する実態調査とそれに対する世間の反響、これら全てが戦後昭和20年代の精神文化の状況を重層的に説明しているように思われる。また、岸本は同時にNHK宗教番組評議会の一員でもあったことも併記しておくべきであり、このような混乱状況からNHKが大衆に正しく宗教の方向性を与える事を方針としたのは然るべき流れであったとも言える。

このような社会状況下で制作されたのが「光を掲げた人びと」や「人生読本」であった。こうした番組変遷は、「精神的支柱の乱立」とも言える混乱時の日本人の宗教的情操をいかにして養おうとしたか、その試行錯誤の跡と見ることができる。CIEの指導で制作された新しい形態の宗教番組である「光を掲げた人びと」だが、年を経るごとに内容はなかば「偉人伝」的な性質のものへと変化し、宗教的要素が次第に薄れていく印象を受ける。CIEの「宗教の平等」の下で制作されたものの、番組内で取り上げられる人物を見ても、新宗教に繋がる人物が選ばれる事もなく、NHKの宗教番組の主軸は結果として「宗教の時間」へと再帰する事となる。

昭和28年に開始した「人生読本」も、人生の幅広いテーマを深い次元で取り扱うという意味では「光を掲げた人びと」とも類似する部分もあり、「立体的な宗教放送」の「横軸」部分の補助的役割を果たしていると言えよう。この後暫くの間、NHKにおけるラジオ宗教放送は再び「宗教の時間」が主軸となり、「人生読本」も周辺的に機能しつつ続く事になる。

「人生読本」は現在「ラジオ深夜便」の「ないとエッセー」として引き継がれ、宗教色はかなり薄まったと言える。現行のラジオ定時宗教番組はこの「宗教の時間」と、後述の「明日へのことば」もその一部を担っていると言えよう。ラジオにおける番組編成やその内容に関しては、これ以降従来通りの伝統宗教を基軸とした内容のものへと定着して今日に至る事から、一旦締め括り、次に一旦テレビ放送に目を向けてみたい。

2 テレビ宗教放送の開始

2-1 「心と人生」から「宗教の時間」へ

日本でテレビ放送が開始されたのは昭和28年であるが、一般家庭への本格的な普及が始まったのは昭和30年代以降である。吉見俊哉によると、テレビが一般家庭へ浸透するまでに一定の期間があったのは、当時のテレビが一台20万円前後と当時の大学卒業生の初任給が8000円程度であった事を鑑みると非常に高額であった為、殆どの人々は主要な駅前広場や神社境内に設置された街

頭テレビを鑑賞していた為という。その人気と集客力を見た飲食店主や商店主が自らの店前にテレビを設置するようになり、やがて一般家庭へと浸透していったようである⁽⁴⁰⁾。昭和34年の皇太子成婚のテレビ中継を契機としてテレビ受像器が一気に一般家庭にも普及し始め、翌年35年にNHKを始め日本テレビ、ラジオ東京、朝日放送、よみうりテレビの民放4社がカラー放送を開始した。テレビのカラー化で番組内容も本格的に充実化が図られ、昭和35年にはまず日本テレビと読売テレビが初の宗教番組「宗教の時間」を放送開始した。これは社主の正力松太郎自らが主に仏教伝播を目的として企画したテレビ局側の自主制作番組で、神社仏閣や行事風景の紹介、宗教者の講話が主な内容であり、正力自らも番組に出演していた⁽⁴¹⁾。

こうした社会的背景の下、NHKは昭和36年度をテレビ史において2つの観点から「転機」と捉えている。一つは社会情勢の変化、もう一つはこうした社会問題を総合的に判断するための教養の涵養の必要性で、それは視聴者からの要請でもあった⁽⁴²⁾。ラジオとテレビというメディアの二重化は、番組制作にも創意工夫が求められることとなり、テレビ番組として組み込みにくい題材、例えば視覚化の難しい内容を、高い質を保ったままでいかに制作するかが課題となった。

NHKは昭和36年にまず「心と人生」というラジオ「人生読本」のテレビ版に位置づけられる番組を開始する。『NHK年鑑15 1962-2』では「心と人生」は「人生を語り、宗教を論ずるこの種の番組は、従来、テレビの教養番組には見られなかったものである」と紹介されている。一年間放送されたこの番組の出演者を見てみると、宗教的職能者や宗教学者、他分野の専門家でありつつ宗教的実践を行っている人物が非常に多いことが分かる。

表2 昭和36年度「心と人生」のテーマと出演者（朝日新聞全国版）
（職業は確認できる範囲で筆者が追記）

月日	テーマ	出演者	職業（筆者追記）
4. 9	仏心の信仰	朝比奈宗源	僧侶
4. 16	ターゲットに寄せて	山室静	詩人
4. 23	内村鑑三先生を思う	矢内原忠雄	経済学者
4. 30	禅窓	関牧翁	僧侶
5. 7	充実した人生	記載なし	
5. 14	庶民の信仰	清水谷恭順	僧侶
5. 21	待つ事の楽しみ	土岐善麿	歌人
5. 28	人生急行	葉上照澄	僧侶
6. 4	ある人生の見方	友松円諦	僧侶
6. 11	人生の幸福を求めて	記載なし	
6. 18	心貧しき者の幸いについて	河上徹太郎	文芸評論家
6. 25	人生を貫く心	八代斌助	伝道師
7. 2	自然と人生	記載なし	
7. 9	モンテニユに学ぶ	関根秀雄	仏文学者

NHK宗教放送の歴史に関する一考察

7.16	別れの時	岸本英夫	宗教学者
7.23	現代の孤独	ジョセフ・ロゲンドルフ	カトリック神父
7.30	浮世の味	立花大亀	僧侶
8.6	宗教的生活者	増谷文雄	僧侶
8.13	心の力	野村実	医師
8.20	釈尊の言葉	中村元	仏教学者
8.27	雨風順時	中野義照	僧侶
9.3	スコットランドの思い出	植村環	伝道師
9.10	科学の中の禅	辻光之助	天文学者
9.17	現代に生きる	勝沼精造	解剖学者
9.24	だるま説法	後藤伊山	僧侶
10.1	謝するという心	荻原井泉水	俳人
10.8	私の宗教遍歴	大木惇夫	詩人
10.15	執着について	亀井勝一郎	文芸評論家
10.22	万葉と私	高木市之助	国文学者
10.29	生きる道	橋本凝胤	僧侶
11.5	よき生涯	天野貞祐	哲学者
11.12	道元と禅	佐藤泰舜	僧侶
11.19	心の通う時	市原豊太	フランス文学者
11.26	歌人蓮月によせて	塚本善隆	僧侶
12.3	真理の探究者アウグスティヌス	石原謙	キリスト教史学者
12.10	うたよみと人生	吉野秀雄	歌人
12.17	やきものとともに	荒川豊藏	陶芸家
12.24	私と信仰	芹沢光治良	小説家
12.31	百八つの煩惱	古川大航	僧侶
1.7	堅い心と柔らかい心	谷川徹三	哲学者
1.14	書と禅	沖六鵬	書家
1.21	ある文人の生涯	福原麟太郎	英文学者
1.28	信仰への道	武田達誓	僧侶
2.4	描きながら考えたこと	福田豊四郎	画家
2.11	人生の曲がり角で	椎名麟三	小説家
2.18	自由を生み出す条件	記載なし	
2.25	修二会の心	狭川明俊	僧侶
3.4	心の遍歴	高田博厚	彫刻家
3.11	つむじ曲がりの心理	大浜皓	中国哲学者
3.18	彼岸によせて	訓覇信雄	僧侶
3.25	中国人から学んだこと	草野心平	詩人
4.1	私の宗教観	緒方知三郎	病理学者

ラジオ「人生読本」と並び、テレビ「心と人生」は厳密には純粋な宗教番組とは言い難いが、「宗教を論ずる」との解説や上記の出演者における宗教者の割合から、非常に近い性質の教養番組であると言えるだろう。そしてラジオではまず「宗教の時間」の後に「人生読本」が誕生したのに対し、テレビ放送においては「心と人生」がまず開始され、入れ替わるように本格的な宗教番組である「宗教の時間」が始まっているのが特徴的である。

ラジオの「宗教の時代」と「人生読本」の視聴率に差が生じていたことはNHKの内部でもある程度は認識されていた。当時の藤本信英NHK京都放送局放送部長は昭和36年5月30日に西本願寺で開かれた宗教放送懇話会上において、ヨーロッパの宗教放送番組と比較して日本の宗教放送の聴取率が3%にすぎない現状を説明、「とくにNHKの例を引いて毎日曜あさの『宗教の時間』に反響がなく、毎朝の『人生読本』という宗教的内容をもった番組が受けている秘密に着目し、「わが国では宗教そのものか、あるいは宗教的なものか、ともかく“宗教”と名を冠すると、ある抵抗感をもって迎えられる。ここに宗教放送の悩みがあり“聴かせる努力”への問題があるのではないかと、その所感を述べている⁽⁴³⁾。2つの放送は放送時間帯も曜日も異なり一概に単純な比較はできないが⁽⁴⁴⁾、参考までに一部の調査を紹介すると、例えば[石井 2003a]の昭和34年11月最終週に郡山で行われた宗教ラジオ放送の聴取率調査を見ると、「宗教の時間」の平均聴取率が1%未満（「0%」と表記、最高聴取率6.2%）であったのに対し「人生読本」の平均視聴率は17.1%（最高聴取率平均34.8%）と、一定の差が認められていたようである⁽⁴⁵⁾。よって藤本の発言は純粋な宗教放送が一般大衆へ浸透するには、多くの困難と課題が残されている事を示す現場の率直な声と言える。メディアの特色を併せて推察してみると、テレビのもつ娯楽との親和性や「人生読本」の一般大衆への馴染み易さも参考として、まずは一般に受容されやすい構成の「心と人生」が本格的宗教放送の前段階的に制作されたのではないかと推察する事もできるが、いずれにせよテレビ教養放送は試行錯誤のまま始まったと言える。表2の通り「心と人生」でブラウン管に登場したのは人生や宗教を直接語る、等身大の間でであった。しかし「心と人生」はわずか一年間と短命なもので、翌週の教育テレビの朝10時から9時への放送枠拡大と共にテレビ「宗教の時間」が開始されると、「心と人生」は半ばそれに吸収されるような形で終了する。「宗教の時間」は「心と人生」が終了した翌週から始まり、その第一回を飾ったのは友松圓諦他による「釈尊誕生」であった。

ここで「心と人生」「宗教の時間」にわたり一つ確かに評価できるのは、視覚化の難しい内容を、高い質を保ったままにいかにかに制作するかという課題に向き合っている点だろう。テレビによって宗教番組の視覚化が実現される事で真っ先に思い浮かびそうなのが、神社仏閣や教会等の紹介や礼拝や講話の実況等、直接視覚に訴える内容を選びそうであるが、本格的な宗教番組「宗教の時間」に移行した後も、そのような構成を主軸と「しなかった」という事である。勿論儀礼や祭事の実況中継等が行われる事もあるが、ラジオとテレビがクロスオーバーするこの時代、ましてやテレビの存在感と影響力がラジオを追い抜くのも時間の問題という最中、メディアの種類によって放送する内容を単純に分けるのは保守的で消極的な姿勢でしかなく、ここにNHKのテレビの可能性への挑戦が伺える。

昭和37年は前年に続き、テレビの特性を活かした番組の更なる具体案が示され、その中に「信

仰について理解を深めるのに役立つ宗教番組」も含まれている⁽⁴⁶⁾。テレビ版「宗教の時間」はこうした番組改正を背景として新設されたもので、そこでも「心と人生」やラジオ「宗教の時間」と同様、各界の宗教的指導者や学者を招いての対談形式が取られた⁽⁴⁷⁾。

一人ないし数人の出演者との対話・座談会形式の構成自体は長年にわたって継続され、ある意味安定した内容の放送が続くが、『NHK年鑑』の番組解説を参考にその内容傾向を通覧すると、20数年間で放送目的自体も緩やかな変化が見て取れる。

例えば『NHK年鑑'64』（昭和39年）の番組解説を見ると「伝統的な宗教を中心に、宗教思想、行事、音楽などをさまざまな形式で取り上げ、宗教的情操を養い、人生の究極的な意味を明らかにすることにつとめた」とあり、一般人の宗教的情操を養う事が主たる目的とされている事に変化はない。しかし40年代に入るとこれに加え信仰者の生活の紹介が以前より増加し始める。さらに昭和43年の『NHK年鑑'68』では「現代のさまざまな苦しみを生き抜いて来た信仰者、宗教家を中心に、広く一般の人びとの宗教体験を紹介しながら、現代人の宗教的情操を養う一般向け番組」とし、いわゆる職能的エリートや専門家以外の、一般の人々の宗教体験にも比重が置かれるようになり、昭和50年代に入るとさらに「現代を生きる為の手がかりとなる事」へと放送の指針がより具体的な方向へ変化し始める。知識による宗教的情操の涵養から一步踏み込む事を目指す側面がより前面に出るようになるのである。

昭和53年の『NHK年鑑'78』の番組解説にて、初めて「自己啓発」という言葉が登場して以降、昭和57年に「こころの時代」へ改題する直前3年間の番組解説は以下の通りである（下線は筆者による）。

宗教を中心に人生を考え、現代を生きる精神力のかん養、自己啓発を目指す番組

(『NHK年鑑'80』)

宗教的なものの考え方の追求を主眼に、人生を考え、心の中を見つめ直し、現代を生きる精神力の涵養、自己啓発を目指す宗教番組。最近とみに視聴者の幅がひろがっており、各層からの反響、問い合わせが増えている(『NHK年鑑'81』)

宗教的なものの考え方をとおして、あらためて人生を考え、心の中を見つめ直し、心豊かに生きる知恵や、確かな生き方への手がかりをつかんでもらおうという番組。視聴者の幅が広がっており、各層からの反響、問い合わせが多い

(『NHK年鑑'82』)

解説で触れられていない事が、必ずしもそれまで題材として番組内で扱われていなかった事を意味しないが、少なくとも番組制作における方針が純粋な情操教育から、それを踏まえた自己啓発、すなわち宗教的生き方を通じて自己を高め、より良い生を歩む自己探求へと番組の指標が推移していることは確認できる。

2-2 「宗教の時間」から「こころの時代へ」——「宗教的情操の涵養」から「心を中心とした自己探求」へ

この頃、現場の制作者側も長年の番組制作の蓄積や視聴者からの番組への反応、さらには制作者達が個人的に会話等で得た意見によって一つの傾向を掴んでいる。それは「宗教の時間」、特に「宗教」が多くの人にとって、特定の人間のみが関与するもので、自分とは無縁の事象であると捉えていたことであった⁽⁴⁸⁾。つまり「宗教の時間」というタイトル自体が、一種の見えない垣根を作っていたという事である。

また、この現場の流れと共に看過できないのは昭和56年に同局放送世論調査所によって行われた「現代日本人の宗教意識」調査である。翌年3月に出された結果の概要によると、信仰の意味は何かとの問いに対し「心の支えや拠り所」が27%、「心の安らぎや落ち着き」が22%と精神的な安定を求める人だけで実際に50%近くを占め、「精神修養、向上心、モラル・バックボーン」と答えた人は10%に留まっている⁽⁴⁹⁾。また、「宗教はあったほうがよい」と答えた人の約6.5割が「人間が生きてゆく上で必要な心の支えや慰めを与えてくれるから」とその理由を述べ⁽⁵⁰⁾、「日本には手本となるようなものがないため、多くの人が迷っている」と回答した人も49%にのぼった⁽⁵¹⁾。こうした結果を踏まえ、昭和59年に刊行された『日本人の宗教意識』内では調査結果を次のように纏めている。

今、世の中が大きくかわりつつある—そういう声をあちこちで聞く。

大きな変動期に人々が宗教に近づく、というのは、きわめて自然なことである。変動期には、これまでそれが正しいことだと信じて疑わなかった規範がその安定を失い、また、これまで価値を持つと思われてきたことが、無価値になったり、マイナスの価値をもつようになってくる。そのような規範と価値観の混乱した状態におちいったら、だれでも、自分はいったい何をすればよいのか、つまるところ人生の目的は何なのか……というような問題にぶつかるであろう。その時、宗教、または、宗教的な物に近づくのは、少しも不思議なことではない。⁽⁵²⁾

近年、日本人が宗教に“回帰”している原因の一つには、このような、社会規範の大きな変動、というか、混乱、というか、そういう現実があるように思われる。だいたんな推測をあえてすれば、いわゆる戦後規範は、抽象的なレベルで、平和はよいことだ、とか、民主主義は守らなければならぬ、という事は教えても、そのために、具体的にどうしなければならぬかは示さなかったのではないだろうか。おそらく、そこから、生き方についての“真空状態”が生じたのであろう。いずれにせよ、新しい規範の体系をもとめて、模索の時代が、すでに始まっていると見なければならぬ。⁽⁵³⁾

調査は「日本人と宗教とのかかわりには、個人の内面に関係した役割を果たす部分がある」とし、新しい規範の必要性を求めている。ここで鍵となりそうなのは「生き方についての真空状態」だろう。つまり道徳的規範や倫理を理念として理解していながらも、日常生活に具体的実践が伴

わず、その精神が根差さずにいる状態である。初期の宗教番組が目的としたのは、日本人全体の精神的涵養であったが、長い時を経て「生き方についての真空状態」を解決すべく自己探求や個々人の人間の生き方の指針となるような実践知たり得る番組作りへと変化した推移が見て取れる。制作者が現場で一般の人々から得た宗教観と調査の傾向は一見矛盾しているようにも思えるが、宗教離れと言われる時代においてさえそれが万人の人生に関わるものであるとする制作側の考えは、多くの人が宗教を「心の拠所」と捉える傾向と合流する事で一つの着地点を得たように見える。それが「こころの時代」という改題だったと言えよう。

2-3 「こころの時代」の現在

調査結果と制作者側の直接的な経験の因果関係には検討の余地はあるものの、「現代日本人の宗教意識」の調査結果も示していた通り、昭和50年代、つまり1970-80年代は実際に宗教・精神文化が大きく変動した時期のただ中であり、当時の気風が番組に何かしらの変化を求めたのは自然なことである。これらの事から宗教を「心」や「困難な時代を生きる」ことを切り口とし、今に生きる人達の宗教性に満ちた生を等身大の指針としてもらい、タイトルもそれが直接的に伝わるようにと改題したという⁽⁵⁴⁾。「こころ」という平仮名を採用し、更に人生を歩む上での宗教的な指針を示したいという意図から「宗教・人生」と副題に添えることとした。それが現在の「こころの時代～宗教・人生～」である。以下は『NHK年鑑'83』に記された改題後初の番組紹介である。

教育テレビ『宗教の時間』は『こころの時代-宗教・人生』と改題するとともに、内容も物質的な豊かさだけでなく、心の豊かさをもとめる現代人のニーズにこたえるように充実を図った。⁽⁵⁵⁾

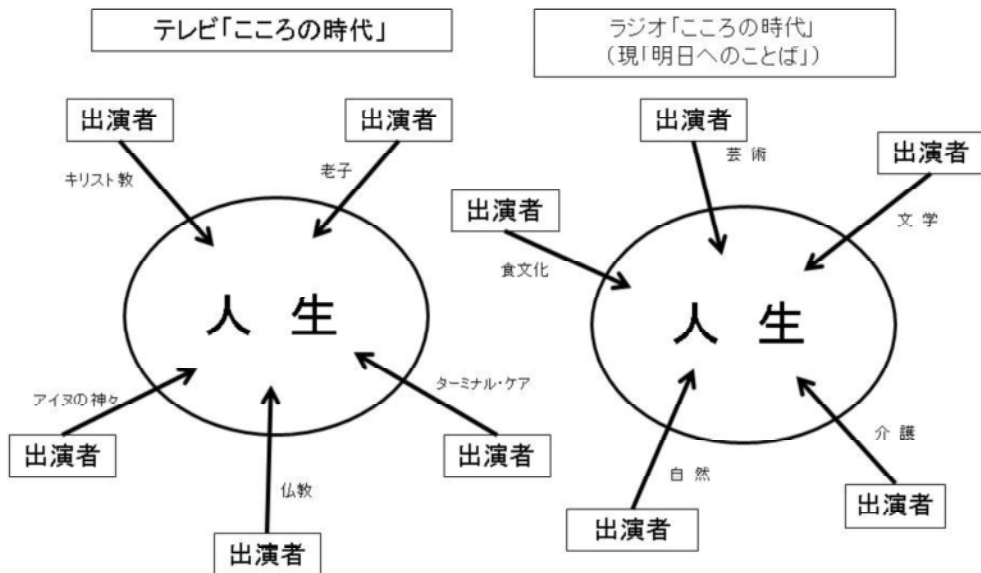
宗教的なものの考え方をとおして、あらためて人生を考え、心の中を見つめ直し、心豊かに生きる知恵や、確かな生き方への手がかりをつかんでもらおうという番組。様々な場で生き、発言している実践家たちの体験、信仰、人生を紹介する“人間再発見”シリーズを月一回放送。⁽⁵⁶⁾

テレビでの「宗教の時間」開始当初から比較すると明確なように、番組内容が「心の豊かさを求める現代人のニーズにこたえる」事、そして「等身大の人間の生」に焦点を絞ることを言語化して明確にしている事が確認できる。

また、平成元年より始まったラジオの深夜放送（後の「ラジオ深夜便」）にて過去の収録分を再放送したところ、予想外の反響を得た事により、「こころの時代」は「深夜便」のいちコーナーとしてラジオにも進出をしている。当初は過去の収録分を再放送していたが、週一回のテレビ放送分を毎日のラジオ放送に用いた為にやがてストックが不足する事態となり、数年後には「深夜便」の制作スタッフが独自に取材・制作をして番組を構成していく事になる。テーマも宗教的

なものに留まらず、生きる知恵や人生の困難に立ち向かう人々の姿を広く紹介する「ラジオ深夜便・こころの時代」が誕生した。よってテレビとラジオの「こころの時代」は同一番組名であるが、一部のスタッフを除き両番組は異なる制作陣が携わる事となり、独自の放送路線を取っていく。この「ラジオ深夜便・こころの時代」は平成22年3月末より「明日へのことば」と改題されているが、その理由として同名番組がメディアを跨って存在する事により、聴取者からの番組の問合せ等でラジオとテレビの窓口でたびたび混乱が生じていたという事務的な背景もあったようである⁽⁵⁷⁾。深夜便の「こころの時代」というタイトルも既に定着していた為に聴取者からの抵抗も懸念されたが、放送20周年も契機となり、深夜便「こころの時代」は「明日へのことば」へと改題された。テレビ放送からの方向路線の分岐にはラジオというメディアの特性や放送時間帯、放送頻度、視聴者層やニーズという様々な要因が多層的に絡み合っていると云える。

現行の宗教番組「宗教の時間」「こころの時代」、そして「こころの時代」を元に生まれた「明日へのことば」は内容の性質からいかなる位置づけにあるか。ラジオ「宗教の時間」が従来の同名番組を継承する形で、伝統宗教の古典の紹介やその知恵の解説等の対談が中心であるが、原点を共にするテレビ「こころの時代」とラジオ「明日へのことば」の現在はいかなるものであるか。



- 矢印に示されるテーマは一例。ラジオ版の方が広範囲に及び、かつての「人生読本」に近いテーマへと変化したと言える。
- 芸術や文学がテーマで取り上げられても、その中に宗教的な要素が含まれるようなケースはある。
- テレビ版が宗教の周辺的なテーマを取り上げる時もあるが、番組を貫くテーマはあくまでも「宗教」「宗教性」である。

実際には明確な線引きができる程単純ではないが、二つの番組を比較すればおよそ上記のような特徴付けが可能であろう。「こころの時代」は一つの独立した宗教番組であるのに対し、「明

日へのことば」はあくまで「ラジオ深夜便」のいちコーナーであり、聴視者もどちらかといえば「深夜便」の常連が多い。日課として聴視する事から話題に豊富さが求められ、結果として生き方の学び先も宗教の他に福祉や教育、文化や文芸、医療、地域づくり等のテーマからより多角的に提供される事で宗教的要素は相対化される。よって結果として生じるのが番組の「宗教」に対する比重という事になる。「こころの時代」「明日へのことば」は、生きるための指針や手がかりを提供する点は共通しているが、前者が後者と根本的に異なるのは、どのような職業の出演者でも人生の拠り所を広義の意味での「宗教（もしくは宗教的なもの）」に置いている点である。焦点を当てるのは、教典の解説というよりは、様々な労苦や苦悩を宗教的な信念を持って生き抜いてきた「人の生そのもの」である。制作側の意図としては、同じ時代を生きる人間としてそこから共感を得たり、宗教について考える契機となってもらふ所にあるという⁽⁵⁸⁾。生きる指針を与えるのみであれば、他の番組でも十分かも知れないが、人生にはそこに留まらない宗教的次元の必要性を示すことに大きな意味がある、というのが「こころの時代」の示すところと言える。

制作者側が出演者の条件として優先するのは、信仰内容というよりその人物の「宗教的な生き方の中身」という事であった。様々な同時代人の宗教的な生を紹介する事で、彼らの生き方に通底する「宗教の本質」「普遍的な宗教性」なるものについて個々人で考え、それを生きる指針としてもらう、というのが番組の目指すものである⁽⁵⁹⁾。

しかし実際には扱う宗教の現状やその公平性等の問題等、依然残されている課題もある。例えば制作者側でも個々人では様々な価値観を持っており、出演者の人選にもある程度の拡散性が生じており、特定の分野の人物に偏る事態も「ある程度は」回避しているようであるが、限られた人数で制作している以上限界はある。例えば、真の意味で公平性を遵守するのであれば、現代において例えば新宗教等がなぜ取り上げられないかという素朴な疑問は未だに議論の俎上に上がる。

番組の目指す方針を第一に鑑みるならば、番組構成上「こころの時代」の真価が発揮されるのは、「視聴者が番組の目指すものを正確に理解した上で、包括的に番組を視聴した時」になりそうである。単発としての番組も質が高く、十分意味あるものであるが、取り上げる宗教の種類に平等性が見られない場合、受け手によっては特定の宗教体験的な内容の受容に留まってしまい、本来制作側が目指す意図と乖離しかねない。従ってより包括的かつ本質的な意味での宗教理解のためには、例えば取り上げる宗教を増やす等の実現によって視聴者側にその多様性を伝える等の必要もあり、そのためには長期的視野での創意工夫も今後の課題になると思われる。

3 まとめ

以上、NHKの宗教番組の歴史を駆け足で俯瞰したが、ここで本作業で確認できたいいくつかの要点をまとめることで、本稿は一旦締めくくりたいと思う。

まず、ラジオ放送開始時からの全体的な宗教番組の流れを見ると、放送内容は純粋な「宗教的情操の涵養」から「人生の生き方の指針を示す」という、生を中心とした内容へと緩やかに推移している事が認められる。ラジオ放送開始直後から昭和50年代にかけて、出演者や放送演出等で

工夫を加える事により、放送内容は徐々に一般人の身近な関心事へと変化していった。全体を通じて静かに、穏やかな雰囲気で行進する「こころの時代」は、心に迷いを抱く人に安心感や生きる指標を与えるのに貢献している。様々な人間や場面を紹介し、それら全てに通底する「普遍的な宗教性」を個人で見出してもらうという方針が、聖職者・非聖職者を問わない出演者の人選と繋がっている。

一方、これが「宗教的情操の涵養」と必ずしも両立しない場合もある。研究者の間ではしばしば取り上げられる問題だが、現在殆ど皆無と言っていいほど新宗教やイスラームはほぼ取り上げられず、神道、ヒンドゥー教なども取り上げられてはいるが現段階では周辺の枠組みに留まっている。既に石井が指摘をし続けてきた事であるが⁽⁶⁰⁾、これらはこんにちの日本人の宗教リテラシーと大きく関わっている問題でもある。「宗教」という教团的枠組に囚われない「宗教性」に領域を広げ、その可能性を伝えるのは、多くの日本人にとっても馴染みややすいと言える一方で、こうした問題を無視できないのもまた事実と思われる。

その副題が示すとおり、「こころの時代」は「宗教・人生（更に言えば、この順序も大切な意味を持っている）」を主軸とする番組であり、そこに比重を置いている以上、見る人に安心感を与えるのが第一条件であると言える。よって現在も大抵の人が「宗教」というものに抵抗感を持っている以上、宗教の公平性の元に新宗教やイスラーム等を持ち出せば、抵抗感を抱く人が少なからず現れかねないのは仕方ない事であろう。しかし一歩踏み込んでみると、そうした宗教を素朴に信仰する人々もまた存在し、同じく人生に悩みや葛藤を抱く事もあるだろうが、彼らがここでも「蚊帳の外」「他者」になってはいないかといった問題も浮上してこないわけではない。こうした宗教に関しては、石井の分析が既に示してきたように、これまでのマスメディア（特に民放）の報道の仕方がその傾向を助長させてきた部分が大きく、一朝一夕で解決できる次元の類ではない。番組の内訳から見ると、NHKの宗教番組もその束縛からは逃れられていない事も確かであろうし、どこかで何かしらの手段を講じなければ解決されない問題といえる。既に触れてきたが、多彩な宗教に関する知識の提供は、間接的に宗教リテラシーの涵養にも繋がる。例えばイスラーム等は国内では縁が無くとも、その正しい知識は異文化理解にも繋がる上でも重要になるだろう。

現在NHKの中ではラジオ「宗教の時間」とテレビ「こころの時代」が厳密な意味での宗教番組で、「明日へのことば」がそれに近い性質の番組と捉えられるが、これはNHKが「宗教」という一つのテーマに対し二ないし三種のアプローチが可能な状態にあることを意味する。例えば「こころの時代」では扱い難い宗教やテーマは「宗教の時間」等で扱うなど、各番組の特色を活用する事で、更なる立体的な宗教番組展開も可能と思われるし、そうした機能分担した展開は少しずつだが既に認められる。「宗教の時間」でヒンドゥーや雅楽等を通じて神道の世界が紹介される事があるが、「こころの時代」でもそうしたテーマが仏教やキリスト教のように受容される日は来るだろうか。更に扱いが難しいと思われる新宗教やイスラーム等や現代の社会問題まで含め、NHK宗教番組が眼差しを向ける対象は多いだろう。

参考文献

- 石井研士「戦後におけるラジオでの宗教放送の変化－三つの調査を比較して－」『國學院大學紀要 文学研究科34』, 2002年 (a)
- －「ラジオと宗教放送」『國學院大學紀要40』, 2002年 (b)
- －「戦後のラジオでの宗教放送とテレビ放送への移行」『國學院大學紀要41』, 2003年 (a)
- －「ラジオと宗教」『高度情報化社会と宗教に関する基礎的研究』, 平成11年度～14年度科学研究費補助金 基盤研究 (B) (2) 研究成果報告書, 2003年 (b)
- －『テレビと宗教 オウム以後を問い直す 中公新書ラクレ293』, 中央公論新社, 2008年
- －「ステレオタイプ化する宗教的リアリティ」『バラエティ化する宗教』青弓社, 2010年
- 吉見俊哉『メディア文化論』有斐閣, 2004年
- 渡邊樫雄『現代日本の宗教』大東出版社, 1950年
- 『GHQ日本占領史第18巻 ラジオ放送』向後英紀解説・訳, 日本図書センター, 1997年
- 『GHQ日本占領史第21巻 宗教』笹川紀勝, 本間信長訳, 日本図書センター, 2000年
- 『愛善苑』, 昭和36 (1961) 年6月号
- 『金光教報』昭和26 (1951) 年12月1日号
- 『ステラMOOK ラジオ深夜便完全読本』NHKサービスセンター, 2005年
- 『中外日報』昭和36 (1961) 年6月2日号
- 『日本の俗信 1 迷信の実態 復刻版』洞史社, 1979年
- 『日本の俗信 2 俗信と迷信 復刻版』洞史社, 1980年
- 『日本放送史 上巻』日本放送出版協会, 1965年
- 『日本放送史 下巻』日本放送出版協会, 1965年
- 『ラヂオ年鑑 昭和9年版』誠文堂, 1934年
- 『ラヂオ年鑑 昭和10年版』(複製版) 大空社, 1989年
- 『ラヂオ年鑑 昭和11年版』誠文堂, 1936年
- 『ラヂオ年鑑 昭和12年版』誠文堂, 1937年
- 『ラジオ年鑑 昭和22年版』日本放送出版協会, 1947年
- 『ラジオ年鑑 昭和23年版』日本放送出版協会, 1948年
- 『ラジオ年鑑 昭和24年版』日本放送出版協会, 1949年
- 『ラジオ年鑑 昭和26年版』日本放送出版協会, 1951年
- 『NHK年鑑15 1962-2』ゆまに書房, 2000年
- 『NHK年鑑'63 昭和38年』ラジオサービスセンター, 1963年
- 『NHK年鑑'78 昭和53年』ラジオサービスセンター, 1978年
- 『NHK年鑑'80 昭和55年』ラジオサービスセンター, 1980年
- 『NHK年鑑'81 昭和56年』ラジオサービスセンター, 1981年
- 『NHK年鑑'82 昭和57年』ラジオサービスセンター, 1982年
- 『NHK年鑑'83 昭和58年』ラジオサービスセンター, 1983年
- 『「現代日本人の宗教意識」調査 結果の概要』NHK放送世論調査所, 昭和57 (1982) 年

『日本人の宗教意識』NHK放送世論調査所，昭和59（1984）年

註

- (1) 石井 2010, 184頁。
- (2) 石井 2008, 114頁。
- (3) 石井 2003a, 2003b, 2003a, 2003bを参照。
- (4) また本稿を執筆するに当たっては，関連資料の収集分析と共に当時の番組制作状況を知る関係者の方から得た話も参考にさせて頂いている。この場を借りてお礼申し上げる次第である。
- (5) 石井 2002b, 4頁。
- (6) 『日本放送史 上』352-353頁，石井2002b, 11頁。
- (7) 同上, 353頁。具体的な各番組の発展については，石井2002bも参照。
- (8) 『ラヂオ年鑑 昭和9年版』, 159頁。
- (9) 『ラヂオ年鑑 昭和10年版』, 122-123頁。
- (10) 『ラヂオ年鑑 昭和11年版』, 27頁。
- (11) 『ラヂオ年鑑 昭和12年版』, 93頁。
- (12) 『ラヂオ年鑑 昭和22年版』, 46頁。
- (13) 『ラヂオ年鑑 昭和23年版』, 67頁。
- (14) 『ラヂオ年鑑 昭和24年版』, 37頁。
- (15) 『日本放送史 上巻』, 732頁。
- (16) 『GHQ日本占領史 第21巻 宗教』, 35-36頁。
- (17) 同上, 13頁。
- (18) 『GHQ日本占領史 第21巻 宗教』, 1頁。笹川による解説文より。
- (19) 石井2003b : 46頁
- (20) 同上。
- (21) 『金光教報』昭和26年12月1日号, 6頁
- (22) 『GHQ日本占領史 第18巻 ラジオ放送』, 3頁。
- (23) 金光教は昭和28年にも「神前奉仕60年」と題して放送されている。
- (24) 朝日新聞, 3月27日付ラジオ欄より。
- (25) 『愛善苑』, 昭和36年6月号, 24頁。「大本日誌」の記事より。
- (26) 『GHQ日本占領史 第21巻 宗教』, 34-35頁。具体的な宗教名は記されていないが、「(新興宗教の)ほとんどは本当は新しくなかった」と戦前からの新宗教について言及している部分があれば，新しく生まれた宗教は「自らの選択に基づいて思考し信仰をもつ自由の成果，教義上の特徴はあまり変わることがないのに宗派の急増となった」と戦後の新宗教の増加の状況に言及している部分もある。また「ある団体は東久邇宮稔彦王子に率いられていた。しかしその団体は法務総裁の助言により，1950年に解散した」と「ひがしくに教」について触れていたりと，詳細な状況まで把握はしていたようである。

- (27) 朝日新聞，昭和29年9月6日付ラジオ欄。「あなたの世直し法は」という放送が11時から45分に設けられた。
- (28) 『ラジオ年鑑 昭和27年版』164頁。
- (29) 同上，164頁。
- (30) 同上，164頁。
- (31) 作兵衛は飢饉時に「農は国の基，種子は農の本。一粒の種子が来年には百粒も千粒にもなる」として己の飢えを凌ぐ為に麦を食す事を拒み死んだ松山藩の農民，並河成資はコシヒカリやササニシキの原種・農林一号の開発者，大和清九郎は貧しく無学文盲ながらも藩主にその孝徳心を認められた高取藩の農民である。
- (32) 同上，164頁。
- (33) 『日本放送史 上』，656頁。
- (34) 『GHQ日本占領史 第18巻 ラジオ放送』，22頁。
- (35) 『ラジオ年鑑 昭和26年版』，89頁。
- (36) 「人生読本」は「宗教の時間」同様教養番組として分類されるが，宗教的テーマも取り上げられるが厳密には宗教番組とは定義しづらい。しかし人生の生き方をテーマとした内容である事から，より気楽に聞ける番組として聴視者側からは幅広い人気を得ようになり宗教放送的な要素も皆無でない事，また後述の「心と人生」という準宗教番組と不可分な関係にもあるため，本稿では触れておきたい。
- (37) 石井2002a：142-143頁。
- (38) 『ラジオ年鑑 昭和24年版』，37頁。
- (39) 『ラジオ年鑑 昭和26年版』，86頁。
- (40) 吉見，181，183頁。因みにこの街頭テレビは日本テレビによる市場戦略で，高額なテレビを購入できなくとも「テレビ放送に熱烈な関心をもつ大衆にテレビ体験をさせ，自らの番組の広告収入にも役立てようという意図」によって設置されたという。
- (41) 例えば昭和36年7月16日に「私の宗教観」というテーマで出演している。当番組は番組編成により平成11（2001）年3月に終了した。
- (42) 『NHK年鑑15 1962-2』，118頁。
- (43) 『中外日報』，昭和36年6月2日号。「“宗教”と出せば抵抗感」記事より。
- (44) 昭和36年当時で，「人生読本」は月曜から土曜までの6時40分から50分（第一放送），「宗教の時間」は日曜日の朝7時から7時30分（第二放送）。ちなみに当時の日曜朝の時間帯は東京ラジオでは「聖書と私」（朝6時30分～45分），文化放送で「セントポール・アワー」（朝6時30分～45分），ニッポン放送で「世の光」（朝6時45分～7時）と，キリスト教系ラジオ番組が平行して放送されていた。
- (45) 石井2003a，114頁。ラジオ福島と福島県立郡山商業高等学校の「ラジオ聴取状況調査」によるもので，昭和34年11月24日から30日にかけてのもの。
- (46) 『NHK年鑑'63』74頁。
- (47) 『NHK年鑑'63』119頁。
- (48) 番組関係者へのインタビューによる。

- (49) 『「現代日本人の宗教意識」調査 結果の概要』, 8頁。
- (50) 同掲書, 18頁。全体の回答としては「心の支え, よりどころ: 27%, 心の安らぎ, 落ち着き: 22%, 先祖をうやまう, とむらう: 12%, 儀式に必要: 1%, 家内安全などの現世利益: 7%, 精神修養, 向上心, モラル・バックボーン: 10%, 習慣になっている: 4%, その他: 6%, 特に意味はない, わからない・無回答: 11%」
- (51) 同掲書, 63頁。「12-C 生き方の手本となるようなものがないため, 多くの人が迷っている」という設問に対し, 「そう思う: 49%, そうは思わない35%, どちらとも言えない, 10%, わからない・無回答: 6%」。
- (52) 『日本人の宗教意識』NHK放送世論調査所編, 87頁。
- (53) 『日本人の宗教意識』NHK放送世論調査所編, 89頁。
- (54) 番組関係者へのインタビューによる
- (55) 『NHK年鑑'83』, 69頁。57年度教養番組の概要より。
- (56) 同上, 175頁。
- (57) NHK広報部への問い合わせに対する回答より。
- (58) 番組関係者へのインタビューによる。
- (59) 番組関係者へのインタビューによる。
- (60) マスメディアの形成する宗教ステレオタイプについては〔石井 2008, 2010〕を参照。石井によれば, 例えば新宗教は怪しい, イスラームは危険, というステレオタイプが誕生したのは主に偏った報道が築き上げられたものであるという。新宗教はすべからず怪しい集団なのか否か, イスラームは本当に全てが危険なのか, それを判断するのはその人にある程度の宗教的な知識がある事が前提で, 殆どの人が聞きかじりの宗教情報をテレビのワイドショーやバラエティ, ニュース報道等から得ている現状を指している。

A Historical Consideration of NHK Religious Programs

Kaoru ENOMOTO

This article views the history of NHK (Japan Broadcasting Corporation) religious program and considers its changes. NHK's religious programs mainly consist of commentary on the Bible or the canons of major religions, talks by priests and religious practitioners, and so on. Although this style seems unchanged since the 1920s', it has been gradually changed to respond to the changing times and demands of society. Programs are frequently renamed and were reconstructed from 1920s' to 1941. However, the programming was stabilized by the birth of the program "Syukyo no Jikan (The Time of Religion)" which developed after WWII. After the war, NHK religious programs set the mission for themselves to lead people to the right understanding of religions and to let people be free from superstition and new religions, which caused social confusion at that time. In the 1960-70s', the program purposes started giving importance for advice on living a religious life (more pragmatical purpose) as well as cultivating religious knowledge, and this tendency became salient in the 80s'. Two approaches - giving cultivating knowledge and pragmatic advice to live more religiously - were established in these days and continue to this day.